

21. 肝細胞癌の肝シンチグラム上での検出部位特に肝硬変症の合併例について

今枝 孟義 仙田 宏平
浅田 修市 土井 偉誉
(岐大・放)

慢性肝疾患の症例を核医学的複合検査法によって、追跡中に肝細胞癌へ移行したと思われる14例の癌発生部位は、肝シンチ上三宅分類で右中前後枝の肝区域に9例も認められた。このことから肝硬変症と肝細胞癌の合併例においては好発部位があるのではないかと考え自験肝細胞癌119例の内、肝硬変症を合併していた74例(内、4例は肝シンチで欠損像を検出しえなく対象から除外した)を対象として肝シンチ上の癌発生部位につき検討を加えたので報告した。解剖学的左・右葉の欠損部位をみると明らかに右葉に多く70例中49例に、次に両葉に17例、左葉が最も少なく4例に認められ、この傾向は肝硬変症の合併(一)群においても同様であった。さらに解剖学的右葉を Cantlie 氏線で right lobe と middle lobe にわけ検討した。左右両葉に欠損像が多発した32例では明らかに right lobe (28例) に比べ middle lobe (32例) に多く認めた。また各 lobe 別に独立して欠損像の頻度につき調べた。middle lobe と left lobe は同じ重量であるのに middle は38例、left は21例に欠損像を認めた。right lobe は63例と最も高く、特に右中前後枝の肝区域、しかも右外側により多く認められた。また右側面像では上半分、しかも背側により多く欠損像を認めた。

一方、肝硬変症の合併(一)の肝細胞癌45例では、right lobe は40例、middle lobe は37例と left lobe の16例に比べ2倍強も多かったが、肝硬変症合併(十)例のごとくさらに小さい肝区域での有意差を認めえなかった。またその右側面像ではやや背側に多い傾向であった。

22. Combined liver-kidney scan の意義

油野 民雄 利波 紀久
久田 欣一
(金大・核)
道岸 隆敏
(黒部厚生病院・核)

〔目的〕 肝脾・腎を同時に描画する肝脾・腎シンチグラフィーは、肝脾・腎相互の位置関係の評価に有効と思われるが、今回日常の診療において、肝脾・腎シンチグラフィーが有効であった症例を供覧すると共に、臨床的有用性に考察を加えた。

〔方法〕 ^{99m}Tc -スズコロイド 2 mCi + ^{99m}Tc -DMSA 4 mCi 静注、約2時間後(一部症例には ^{99m}Tc -スズコロイド 2 mCi + ^{99m}Tc -DTP A 15 mCi 静注約10～15分後)にシンチカメラを用いて肝脾・腎シンチグラム像を得た。

〔結果ならびに結論〕 正常肝脾・腎シンチグラム像は、肝脾・腎間に間隙を認めず接続して描画される。以下、異常症例を供覧する。肝右側後下縁に限局性欠損所見を肝シンチグラム上2例中1例では、肝脾・腎シンチグラフィーにより欠損が腎外性のものであることが確認され、その後の ^{131}I -BSP 肝胆道シンチグラフィーにより retroplaced gall bladder によるものであることが証明された。また残りの1例は、肝脾・腎スキャンにより腎上極に欠損所見を認め、腎性(血管造影により腎囊腫が判明)のものであることが確認された。子宮癌の症例では、肝スキャン上右側後下縁の著明な圧迫欠損(?)を認め、その後の肝腎スキャンにより腫大した水腎症による肝圧迫であることが証明された。また、左副腎の褐色細胞腫では、肝脾、腎スキャンで脾・左腎間の著るしい分離所見を認めた。以上、肝脾・腎シンチグラフィーは肝脾・腎相互の位置関係と腎上部の病変の評価に有効であった。